

現代文序説テキスト

〈目次〉

理論編

- ・ 文と文の関係性
- ・ 読解原則
- ・ まとめ

演習編

- ・ 単純要約
- ・ 構造把握
- ・ 総合演習
- ・ 小説対策
- ・ 答え

《文と文の関係一覧表》

転換	同格			展開					観点
	累加型	対比型	イコール型	単純接続型	説明型	理由型	逆接型	順接型	型
① — ②	① + ②	① ↑ ↓ ②	① ②	① — ↓ ②	① ↑ ②	① ↑ ②	① ↑ ↓ ②	① ↓ ②	図示
さて、ところで	さらに	一方、あるいは	たとえば、つまり	⊖	⊖	なぜなら	しかし	だから	代表的接続語

※①、②は文番号を表す。

《観点》

1. 展開Ⅱ話の内容が前に進み、展開している
2. 同格Ⅱ話の内容が前には進まず、同じ性質の要素を拡充する
3. 転換Ⅱこれまでの話とは別の話をする

《文のつながりの型》

1. 1 順接型Ⅱ前の文の内容が後の文の内容の理由になる型。

「だから」、「したがって」、「そのため」などが補える。

例1) ①雨が降った。②だから、試合が中止になった。

注含意の「だから」は、「換言型」とも考えられる。

例2) ①すべての日本人は内気だ。②日本人である田中は内気だ。

①↓② ①⇔②

1. 2 逆接型Ⅱ前の文の内容と反対の内容を後の文で述べる型

「しかし」、「だが」、「けれども」、「ところが」、「それにもかかわらず」などが補える

例3) ①一生懸命練習した。②しかし、試合に負けた。

1. 3 理由型Ⅱ前の文の理由を後の文で述べる型

「なぜなら」、「それはくから」、「というのは」などが補える。

例4) ①試合は中止になった。②雨が降ったのだ。

1. 4 説明型Ⅱ前の文で述べた内容の一部分を補足的に説明する型

例5) ①朝顔が咲いた。②それは、弟が植えたものだ。

1. 5 単純接統型Ⅱ前の文の内容を後の文で引き継いで、いろいろと展開させる型

〔問題提起⇔答え〕、〔事実⇔意見・解釈〕、〔引用⇔評価〕、〔内容提示⇔展開内容〕などがある。他の型に収まらないものは、単純接統型とする。

例6) ①この問題はどうか解決しようか。②時間によって違う。

例7) ①タバコを吸う人は吸わない人に比べ、肺がんになりやすいという調査結果がでている。②肺がんになりたくなければ、たばこはひかえるべきだろう。

例8) ①塩分は採りすぎない方が良いと○○氏は言う。②確かにその通りだろ思う。

例9) ①8月6日。②私はこの日を忘れない。

2. 1 イコール型Ⅱ前の文の内容を後の文で繰り返したり、言葉を換えて同

じことを言ったりする型

「たとえば」、「つまり」、「要するに」、「言い換えれば」、「すなわち」などが補える。

例10) ①学生らしい服装をしないで。②つまり、華美でなく落ち着いたものであればよいのです。

2. 2 対比型Ⅱ前の文にある内容に後の文の内容を対比、対立させ、あるいは選択させる関係にある型

「あるいは」、「一方」、「それに対し」などが補える

例11) ①彼はその案に賛成だ。②一方、僕は反対だ。

例12) ①山にいかうか。②それとも海にいかうか。

2. 3 累加型Ⅱ前の文の内容に、後の文の内容を付け加えたり並列したりする関係の型

「さらに」、「その上」などが補える。「〜も」という助詞を用いることもある。

例13) ①彼は中国語ができる。②その上、韓国語もできる。

3. 1 転換型Ⅱ前の文の内容から転じて、後の文で別の内容を展開する関係の型

「さて」、「ところで」、「次に」などが補える。

例14) ①お集まりいただきありがとうございます。②さて内容に移らせていただきます。

補足

1. まとまりをなすものは、□で囲う。

例1) ①問題は二つある。②一つめは、お金の問題である。③二つめは、時間の問題である。

①Ⅱ②+③

2. 9つの型は、文中の節と節の関係にもなりうる。

例1) ①困難だったが、②なんとか成功した。

①↑↓②

3. 前の文と後の文が2つ以上のつながりの型を持つこともある。

例1) ①その考えも正しい。②しかし、この考えも正しい。

①↑↓or+②

この例は、「逆接型」と、「累加型」である。

《読解原則》

1. 抽象⇌具体

重要な部分は、具体(例)を伴う抽象部分である。ただし、抽象部分が抽象的すぎる場合は、適度に具体化せねばならない。この具体性の加減は慣れるしかない。

例1) ①小説のテーマとして残されているものは、社会化されていない人の内面である。②社会化されていないとは、一般の人々に広く理解されていない人の内面である。③たとえば、ひきこもりの人の心や、発達障害の人の心などである。

上の例1は図示すると、

①⇌②⇌③

となる。具体部分は③なので、それを○で括って

①⇌②(⇌③)

となり、重要部分は残った、抽象部分の①と②である。要約すると、「残された小説のテーマは、一般の人々に広く理解されていない人の内面の部分である。」となる。要約の際、「社会化」という言葉を具体化した。なぜなら、「社会化」という言葉の意味は、はっきりしないからである。このことについては、「間接表現⇌直接表現」参照。

2. 事実⇌意見・解釈

「事実」とは、自然に起こる事象や、過去に起こった出来事や、現在起きている出来事であり「体験」、「伝聞」などを含む。「ある日」など時間や、「仙台で」など場所の表現があると「体験」と判断できる。また、「くによれば」、「くという」などの表現により、「伝聞」と判断できる。「事実」は、テストや調査によって、真偽が客観的に判定できるものである。一方、「意見・解釈」とは、何事かについてある人が下す判断である。「くと考える」「くだろう」、「くだ」、「くは違いない」、「くではないくだろうか」などの表現が手がかりになる。

重要な部分は「意見・解釈」部分である。

例1) ①タバコを吸う人は吸わない人に比べ、肺がんになりやすいという調査結果がでている。②肺がんになりたくなければ、たばこはひかえるべきだろう。

上の例は、図示すると

①⇌②

となる。①という事実を受けて、②の意見へと「単純接続」しているからである。

3. 問題提起⇔答え↑理由

重要な部分は「答え」部分である。なぜそのような「答え」が導けるのかという理由も抑えることが必要なこともある。

4. 否定⇖肯定

「否定」とは、「〜でない」と述べている部分である。「〜でない」ならば、どうなのかという肯定「〜である」を探す必要がある。

例1) ①大学受験に必要なのは、才能ではない。②大学受験に必要なものは努力である。

この例は図示すると、

①⇖②

となる。否定部分を○に入れて

(①⇖) ②

と書き、重要部分は②であるとする。

5. (譲歩) ↑↓逆接

「譲歩」とは、「もちろん」、「たしかに」、「なるほど」などと相手の主張を一旦受け入れることである。「逆接」とは、「譲歩」部分を「しかし」、「だが」などで打ち消して後の文で自説を展開するつながり方である。重要部分は逆接の後である。

例1) ①確かに、大学受験の合否には才能の要因もあるかもしれない。②しかし、高校の学習範囲という極めて狭い領域内での勝負においては、努力のほうが大きき要因である。

この例は、図示すると

①↑↓②

となる。譲歩部分を○に入れて

(①↑↓) ②

と書き、重要部分は②であるとする。

6. 間接表現⇖直接表現

「間接表現」とは、言いたいことをそのままの形でいうのではなく、比喻を用いたり、関連のあることでのめかしたりするなどして、相手に言いたいことを伝える表現である。「間接表現」は現代文の記述問題の解答の表現としては使ってはならない。言いたいことをそのまま表している「直接表現」を使って解答しなければならない。重要なのは、「直接表現」である。

例1) ①彼は、身長が非常に高い。②雲を衝くばかりだ。

この例は図示すると、

① || ②

となる。比喩部分の②を○に入れて、

① (|| ②)

と書き、重要部分は①であるとすると。

7. 旧情報 || 新情報、旧情報 & 新情報

「旧情報」とは、今読んでいる文以前にでてきた内容が繰り返されている部分である。「新情報」は新しくでてきた部分である。重要なのは、「新情報」部分であり、新しい内容がでてくる度に傍線を引くなどしてチェックすべきである。ただし、「旧情報」は言い換えであるので、前に出てきた同じ内容の対応部分と比較し、よりよい表現の方を選ぶ。「このように」などのまとめ表現で繰り返されて旧情報がでてきやすい。

例1) ①僕は、映画が好きである。②週に2回は映画館に足をはこぶくらい好きである。③このように非常に映画好きな僕であるが、そのためにある失敗をしたことがある。

この例は図示すると

① || ② || ③前半 & ③後半となる。

①がまず新情報として出現し、それを②で言い換える。②が旧情報となる。③では、前半部分の「このように非常に映画好きな僕であるが」でさらに言い換えて、後半部分で新情報である「そのためにある失敗をしたことがある」ということを展開していくのである。③に①と②の情報が含まれているので、重要なのは③のみとなる。

8. 引用 & 評価

「引用」とは、他人の言葉や文章を自分の文章に引いて用いることである。引用した文章に対して、筆者がどのような態度をとるか（|| 評価）が重要である。

9. テーマへの関連度

テーマに関連性の強く、一般性をもつものが重要部分である。テーマは、タイトルや「〜は」という主題表現、「〜について考えてみよう」などのテーマを設定する部分、問題提起、文章全体を貫いて出現している主要語句から抽出する。一般性をもつとは、個人的な話ではなく、多くの人にあてはまる話である。たとえば、私が昼食にカレーを食べようか、ラーメンを食べようかというようなことは、個人的な話である。一方、言語の音と意味との結びつきが必然的でない、というような、多くの人がもつ言語についての話は一般性があるという。

例1) ①日本の「野球」は、アメリカの「ベースボール」とは異なる。②その競技への考え方が、日本とアメリカでは異なるのである。③私は、日本の「野球」は嫌いである。④日本の「野球」は第一の目標に勝利があり、その目標にむけて全員が協力してプレーする。⑤いわば、カインシャの縮図である。⑥個人のことよりも、全体のことを優先する。⑦一方で、アメリカのベースボールは個人主義的である。⑧チームが勝つことも、もちろん目的とはしているが、それよりも、個人が良いプレーをし自己の能力を発揮することに重点をおいているのである。⑨バスケットにおいても、同様である。⑩このように、日本の「野球」は、アメリカの「ベースボール」とは異なる。

この例を図示すると、

① || ② — ③ — ④ || ⑤ || ⑥ — ↑ ↓ ⑦ || ⑧ — ⑨ — ⑩
 となる。③は個人的な話であり、⑨はチームの「野球」からそれた、「バスケット」の話であるので、削除する。すると、

① || ② || ④ || ⑤ || ⑥ — ↑ ↓ ⑦ || ⑧ — ⑩

というような、いわば入れ子構造が見えてくる。

① || ②なので、①と②を比較すると、②のほうが「考え方」という言葉が含まれ、①よりも②のほうが、わかりやすいために、①は消して②を残す。また、④ || ⑤ || ⑥においても、⑤は比喩なので削除する。④と⑥はどちらをとるか迷うが、⑥をとるのが良いだろう。なぜなら、日本とアメリカとの、個人と全体という観点における比較・対比があり、対比の整合性をつけたいからである。

同じように、⑦ || ⑧においては、⑦を削除し⑧を重要部分とする。なぜなら、⑦の「個人主義的」ということばが、政治思想の文脈でつかわれるかもしれない多義的であり、間接的表現だからである。

このような作業を経て、

② || ⑥ — ↑ ↓ ⑧ — ⑩

と書ける。②と⑩は② || ⑩であるので、どちらかを重要部分とするが、どちらも同じ内容なので、どちらでもよい。

こうして最終的に

② || ⑥ — ↑ ↓ ⑧ — ⑩ or ⑥ — ↑ ↓ ⑧ — ⑩

となり、要約は「日本の『野球』とアメリカの『ベースボール』は、日本がチーム全体を優先し、アメリカは個人に重点をおく点において異なる。」となる。

《まとめ》

実践的には、文章中に

- 1、新しい内容が出てくる度に線を引く
- 2、その際、言い換えは比較して良い方を選び、

- 3、具体例、引用、事実、譲歩、間接表現には線を引かない

という方法で文章中の重要部分を抽出する。

演習編

1. 次の文章を読んで後の問に答えよ。

①そこでそういうものを開化とすると、ここに一種妙なパラドックスとでもいいたしよるか、ちよつと聞くと可笑(おか)しいが、実は誰しも認めなければならぬ現象が起こります。②元来なぜ人間が開化の流れに沿うて、以上二種の活力を発現しつつ今日に及んだとかいえば生まれながらそういう傾向をもっていと答えるより外に仕方がない。③これを逆に申せば吾人(ごじん)の今日あるは全くこの本来の傾向あるがために外ならのであります。④してみれば古来何千年の労力と歳月を挙げてようやくの事現代の位置まで進んできたのであるからして、いやしくもこの二種類の活力が上代から今に至る長い時間に工夫し得た結果として昔よりも生活が楽になっていなければならぬはずであります。⑤けれども実際はどうか。打ち明けて申せばお互いの生活ははなはだ苦しい。

⑥昔の人に対して一步も譲らざる苦痛の下に生活しているのだという自覚がお互いにある。⑦否(いな)、開化が進めば進むほど競争がますます劇(はげ)しくなつて生活はいよいよ困難になるような気がする。

⑧昔は死ぬか生きるかのために争つたものである。⑨それだけの努力を敢(あ)えてしなければ死んでしまう。⑩已(や)むを得ないからやる。⑪今日は死ぬか生きるかの問題は大分超越している。⑫それが変化してむしろ生きるか生きるかという競争になつてしまつたのであります。⑬生きるか生きるかというのは可笑(おか)しゅう(ご)ざいます、Aの状態で生きるかBの状態で生きるかの問題に腐心しなければならぬという意味であります。

夏目漱石「現代日本の開化」 一部中略

問…「開化」による、「パラドックス」の内容を、「昔」と「今日」の対比も含めて、まとめよ。一文にまとめなくともよい。

注…「二種の活力」とは労力を省きたい願望と、気ままに娯楽を図りたい願望をいう。この内容を答えに含めずに答えよ。

ヒント…「パラドックス・逆説」Ⅱ「一見Aだが、実はB」という構文に当てはめる。

2. 次の文章を読んで重要な箇所を指摘せよ。

①僕は日本の古代文化について殆んど知識を持っていない。②ブルーノ・タウトが絶讃する桂離宮も見ることがなく、玉泉も大雅堂も竹田も鉄斎も知らな

いのである。③いわんや、秦蔵六だの竹源齋師など名前すら聞いたことがなく、第一、めったに旅行することがないので、祖国のあの町この村も、風俗も、山河も知らないのだ。④タウトによれば日本に於ける最も俗悪な都市だという新潟市に僕は生れ、彼の蔑み嫌うところの上野から銀座への街、ネオン・サインを僕は愛す。⑤茶の湯の方式など全然知らない代りには、猥りに酔い痴れることをのみ知り、孤独の家居にいて、床の間などというものに一顧を与えたこともない。

①けれども、そのような僕の生活が、祖国の光輝ある古代文化の伝統を見失ったという理由で、貧困なものだとは考えていない。②（然し、ほかの理由で、貧困だという内省には悩まされているのだが――）

①タウトはある日、竹田の愛好家というさる日本の富豪の招待を受けた。②客は十名余りであった。③主人は女中の手をかりず、自分で倉庫と座敷の間を往復し、一幅ずつの掛物を持参して床の間へ吊し一同に披露して、又、別の掛物を取りに行く、名画が一同を楽しませることを自分の喜びとしているのである。④終つて、座を変え、茶の湯と、礼儀正しい食膳を供したという。⑤こういう生活が「古代文化の伝統を見失わない」ために、内面的に豊富な生活だと言うに至つては内面なるものの目安が余り安直で滅茶苦茶な話だけでも、然し、無論、文化の伝統を見失つた僕の方が（そのために）豊富である筈もない。

①いつかコクトオが、日本へ来たとき、日本人がどうして和服を着ないのだろうかと言つて、日本が母国の伝統を忘れ、欧米化に汲々たる有様を嘆いたのであった。②成程、フランスという国は不思議な国である。③戦争が始ると、先ずまっさきに避難したのはルーヴル博物館の陳列品と金塊で、パリの保存のために祖国の運命を換えてしまった。④彼等は伝統の遺産を受継いできたが、祖国の伝統を生むべきものが、又、彼等自身に外ならぬことを全然知らないようである。

①伝統とは何か？②国民性とは何か？③日本人には必然の性格があつて、どうしても和服を發明し、それを着なければならぬような決定的な素因があるのだろうか。

①講談を読むと、我々の祖先は甚だ復讐心が強く、乞食となり、草の根を分けて仇を探し廻っている。②そのサムライが終ってからまだ七八十年しか経たないのに、これはもう、我々にとっては夢の中の物語である。③今日の日本人は、凡そ、あらゆる国民の中で、恐らく最も憎悪心の少ない国民の中の一つである。④僕がまだ学生時代の話であるが、アテネ・フランセでロベール先生の歓迎会があり、テーブルには名札が置かれ席が定まっていた、どういふわけだか僕だけ外国人の間にはさまれ、真正面はコット先生であった。⑤コット先生は菜食主義者だから、たった一人献立が別で、オートミルのようなものばかり食っている。⑥僕は相手がなくて退屈だから、先生の食欲ばかりもつばら観察していたが、猛烈な速力で、一度匙をとりあげると口と皿の間を快速力で往復させ食べ終るまで下へ置かず、僕が肉を一きれ食ううちに、オートミルを一皿すすり込んでしまう。⑦先生が胃弱になるのはもつともだと思つた。⑧テーブルスピーチが始つた。⑨コット先生が立上つた。⑩と、先生の声は沈痛なもので、突然、クレマンソーの追悼演説を始めたのである。⑪クレマンソーは前大戦のフランスの首相、虎とよばれた決闘好きの政治家だが、丁度その日の新聞に彼の死去が報ぜられたのであつた。⑫コット先生はボルテール流のニヒリストで、無神論者であつた。⑬エレジヤの詩を最も愛し、好んでボルテールのエピグラムを学生に教え、又、自ら好んで誦む。⑭だから先生が人の死について思想を通したものでない直接の感傷で語ろうなどは、僕は夢にも思わなかつた。⑮僕は先生の演説が冗談だと思つた。⑯今に一度にひっくり返すユーモアが用意されているのだろうと考えたのだ。⑰けれども先生の演説は、沈痛から悲痛になり、もはや冗談ではないことがハッキリ分つたのである。⑱あんまり思いもよらないことだったので、僕は呆気にとられ、思わず、笑いだしてしまつた。⑲―その時の先生の眼を僕は生涯忘れることができない。⑳先生は、殺しても尚あきたりぬ血に飢えた憎悪を凝らして、僕をにらんだのだ。

①このような眼は日本人には無いのである。②僕は一度もこのような眼を日本人に見たことはなかつた。③その後も特に意識して注意したが、一度も出会つたことがない。④つまり、このような憎悪が、日本人には無いのである。⑤『三国志』に於ける憎悪、『チャタレイ夫人の恋人』に於ける憎悪、血に飢え、八ツ裂にしても尚あき足りぬという憎しみは日本人には殆んどない。⑥昨日の敵は今日の友という甘さが、むしろ日本人に共有の感情だ。⑦およそ仇討にふさわしくない自分達であることを、恐らく多くの日本人が痛感しているに相違

ない。⑧長年月にわたって徹底的に憎み通すことすら不可能にちかく、せいぜい「食いつきそうな」眼付ぐらいが限界なのである。

①伝統とか、国民性とよばれるものにも、時として、このような欺瞞が隠されている。②凡そ自分の性情にうらはらな習慣や伝統を、あたかも生来の希願のように背負わなければならないのである。③だから、昔日本に行われていたことが、昔行われていたために、日本本来のものだということは成立たない。④外国に於て行われ、日本には行われていなかった習慣が、実は日本人に最もふさわしいことも有り得るし、日本に於て行われて、外国には行われなかった習慣が、実は外国人にふさわしいことも有り得るのだ。⑤模倣ではなく、発見だ。⑥ゲーテがシェクスピアの作品に暗示を受けて自分の傑作を書きあげたように、個性を尊重する芸術に於てすら、模倣から発見への過程は最もしばしば行われる。⑦インスピレーションは、多く模倣の精神から出発して、発見によって結実する。

①キモノとは何ぞや？ ②洋服との交流が千年ばかり遅かったただけだ。③そうして、限られた手法以外に、新らたな発明を暗示する別の手法が与えられなかっただけである。④日本人の貧弱な体躯が特にキモノを生み出したのではない。⑤日本人にはキモノのみが美しいわけでもない。⑥外国の恰幅のよい男達の和服姿が、我々よりも立派に見えるに極まっている。

①小学生の頃、万代橋という信濃川の河口にかかっている木橋がとりこわされて、川幅を半分に埋めたて鉄橋にするというので、長い期間、悲しい思いをしたことがあった。②日本一の木橋がなくなり、川幅が狭くなって、自分の誇りがなくなるのが、身を切られる切なさであったのだ。③その不思議な悲しみ方が今では夢のような思い出だ。④このような悲しみ方は、成人するにつれ、又、その物との交渉が成人につれて深まりながら、かえって薄れる一方であった。⑤そうして、今では、木橋が鉄橋に代り、川幅の狭められたことが、悲しくないばかりか、極めて当然だと考える。⑥然し、このような変化は、僕のみではないだろう。⑦多くの日本人は、故郷の古い姿が破壊されて、欧米風な建物が出現するたびに、悲しみよりも、むしろ喜びを感じる。⑧新しい交通機関も必要だし、エレベーターも必要だ。⑨伝統の美だの日本本来の姿などというものよりも、より便利な生活が必要なのである。⑩京都の寺や奈良の仏像が全

滅しても困らないが、電車が動かなくては困るのだ。⑩我々に大切なのは「生活の必要」だけで、古代文化が全滅しても、生活は亡びず、生活自体が亡びない限り、我々の独自性は健康なのである。⑪なぜなら、我々自体の必要と、必要に応じた欲求を失わないからである。

3. 次の文章を読んであとの問に答えよ

ある婦人が私に言った。私が情痴作家などと言われることは、私が小説の中で作者の理想の女を書きさえすれば忽ち消える妄評だということを。まことに尤もなことだ。昔から傑作の多くは理想の女を書いているものだ。けれども、私が意志することによって、それが書けるか、というと、そうはたやすく行かない。

誰しも理想の女を書きたい。女のみではない、理想の人、すぐれた魂、まことの善意、高貴な^Aセイシンを表現したいのだ。それはあらゆる作家の切なる希いであるに相違ない。私とてもそうである。

だが、書きだすと、そうは行かなくなってしまう。

誰しも理想というものはある。オフィスだの喫茶店であらゆる人が各々の理想に就て語り合う。理想の人に就て、政治に就て、社会に就て。

我々の言葉はそういふ時には幻術の如きもので、どんな架空なものでも言ひ表すことができるものだ。

ところが、¹文学は違う。文学の言葉は違う。文学というものには、言葉に対する怖るべき冷酷な審判官がおるので、この審判官を作者といふ。この審判官の鬼の目の前では、幻術はきかない。すべて、空論は拒否せられ、日頃口にする理想が真実血肉こもる信念思想でない限り、原稿紙上に足跡をとどめることを厳しく拒否されてしまうのである。

だから私が理想の人や理想の女を書こうと思つて原稿紙に向つても、いざ書きだすと、私はもうさつきまでの私とは違う。私は鬼の審判官と共に言葉をやり分け、言葉にこもる真偽を嗅ぎわけておるので、こうして架空な情熱も思想もすべて襟首をつまんで投げやられてしまう。

私はいつも理想をめざし、高貴な魂や善良な心を書こうとして出発しながら、今、私が現にあるだけの低俗醜悪な魂や人間を書き上げてしまうことになる。

私は小説に於て、私を裏切ることができない。私は善良なるものを意志し希願しつつ醜怪な悪徳を書いてしまうといふことを、他の何人よりも私自身が悲しんでいるのだ。

だから、理想の女を書け、という、この婦人の厚意の言葉も、私がそれを単に意志するのみで成就し得ない文学本来の宿命を見落しておるので、文学は、ともかく、書くことによって、それを卒業する、一つずつ卒業し、一つずつ捨ててそして、よじ登って行くよりほかに仕方がないものだ。ともかく、作家の手の爪には血が滲んでいるものだ。

男の作家にとっては、理想の男を人間を書くことと同様に、理想の女を書くことが変らざる念願であらう。

然し、日本の文学には、理想の女というものは殆ど書かれていない。要するに、作家の意志が、作家活動というものが、現実に縛られているのだ。人間を未来に求め、人間をそのあらゆる可能性の上で求め、探り、とらえ、そして、かくの如くに表現することによって実在せしめようとする悲願を持っていないのだ。

いわゆる自然派というヨーロッパ近代文学思想の移入（あやまれる）以来、日本文学はわが人生をふりかえって、過去の生活をいつわりなく紙上に再現することを文学と信じ、未来のために、人生を、理想を、つくりだすために意欲する文学の正しい宿命を忘れた。

単にわが人生を複写するのは綴方の領域にすぎぬ。そして大の男が綴方に没頭し、面白くもない綴方を、面白くない故に純粹だの、深遠だの、神聖だなどと途方もないことを言っていた。

小説というものは、わが理想を紙上にもとめる業くれで、理想とは、現実に見たされざるもの、即ち、未来に、人間をあらゆるその可能性の中に探し求め、つかみだしたいという意欲の果であり、個性的な思想に貫かれ、その思想は、常に書き、書きすることによって、上昇しつつあるものなのである。

けれども、小説は思想そのものではない。思想家が、その思想の解説の方便に小説の形式を用いるといふ便宜的なものではない。即ち、芸術というものは、たしかに絶対なもので、小説の形式によってしかわが思想を語り得ないといふ先天的な資質を必要とする。

²小説は、思想を語るものではあつても、思想そのものではなく、読物だ。即ち、小説というものは、思想する人と、小説する戯作者と二人の合作になるもので、戯作の広さ深さ、戯作性の振幅によって、思想自体が発育伸展する性質のものである。

明治末期の自然派の文学以来、戯作性というものが通俗なるもの、純粹ならざるものとして、純文学の埒外へ捨て去られた。³それは、実際に於ては、むしろ文学精神の退化であることを、彼らは気付かなかつた。

即ち彼等は、戯作性を否定し、小説の面白さを否定することが、実は彼らの思想性の貧困に由来することを知らなかつた。彼等には思想がなかつた。理想

がなかった。人生を未来に托して、常により高く生きぬこうとする必死な意欲を知らなかった。

思想性が稀薄であるから、戯作性、面白さと、だき合うことができなくて、戯作性といふものによって文学の純粋性が汚されるかのような被害妄想をいだいたわけだが、本当のところは、戯作性との合作に堪えうるだけの逞しい思想性がなかったからに外ならぬ。

小説にとつては、戯作性といふものが必要なもので、それは小説を不純ならしめるどころか、むしろ思想性を伸展させ、育てるものだ。日本には、そういう文学の正統、つまり、ロマンといふものの意欲が欠けていた。つまりは本当の思想が欠けており、より高く生きようとする探求の意欲がなかったから、戯作性との合作に堪えうるだけの思想性がなく、ロマンがなかったのである。

平野謙が私の小説をデフォルメだなどと言うのは大間違いで、私ぐらい正統的な文学は、むしろ、日本には外にない。私のめざしているものは、ロマン、思想家と戯作者の合作品であり、最も正統的な文学だ。

批評家は、作家のめざしているものを見よ。最高の理想をめざして身悶えながら、^Bオジョクにまみれ、醜怪な現実に足をぬき得ず苦悶悪闘の悲しさに一掬の涙をそそぎ得ぬのか。然り。そそぎ得ぬ筈だ。おん身らは、かかる苦闘を知らないのだから。日本文学の伝統などというものを表面の字づらの上で読みとり、綴り合せて、一文を草することしか知らないのだから。

島崎藤村や夏目漱石がロマンだなどとは大間違いです。彼らは、理想の女を書こうともしていないではないか。理想の女をもとめる魂、はげしい意欲のないロマンなどがあるものか。

永井荷風が戯作者などとは大嘘です。彼は理想の女をもとめてはいない。現実の女を骨董品の如き好色欲をもつて紙上に。モテアソンでいるだけで、理想の女をもとめるために希願をこめて書きつづけられた作品ではない。まだしも西鶴は八百屋お七を書いている。

大袈裟に力む必要もない。大文学、大長篇である必要もない。ささやかな短篇で、たとえば、メリメの如く、カルメンからコロンバへ、さらに遂には人を殺すヴィナスの像へ、つつましく、生長しつづけて行く彼の恋人、理想の女を見たまへ。一生涯、たった一人の夢の女を育てつづけ書きつづけたメリメといふ先生も奇妙な先生だが、ともかく、そこには、常に読者の胸を打つ何かがあるもっている筈だ。それを読み得る人が読み得た幸をうるだけの、それ以外の何物でもないただそれだけのものにすぎぬが、所詮文学といふものはただそれだけのものなのである。

私といえども、私なりに、ともかく、理想の女を書きたいのだ。否、理想の人間を、^Dシンカクを書きたいのだ。ただ、それを書こうと希願しながら、いつ

も、醜怪なものしか書くことができないだけなのだ。

虚しい一つの運動であるか。死に至るまで、徒に虚しい反覆にすぎないのか。書き現したいといふこと、意欲と、そして、書きつづけるといふ運動を、ともかく私は信じているのだ。それが私のものであるといふことを。

(坂口安吾「理想の女」)

問1…傍線部1とは、どういうことか、120字程度で答えよ。

ヒント…文学が「何」と違い、「どう」なのかを記述する。

問2…傍線部2とは、どういうことか、次の選択肢から最も適切なものを選び。

①小説とは、便宜的に思想を語るものであっても、思想そのものではなく、理想を求める思想の性質と読み物として面白さを求める性質が表裏の結びつきをもっているために、面白が増すと思想も発展するという読み物だということ。
②小説とは、思想を語るものであっても、思想そのものではなく、未来に可能性を探しつかみたいという理想をもとめるものであると同時に、純粋性を求めることによって、思想も発展するという読み物だということ。

③小説とは、先天的資質を必要とする手段としての思想を語るものであっても、思想そのものではなく、未来の可能性という理想をもとめる筆者の側面と、面白さを求めるといふ筆者の側面とが影響し、戯作性が増すと思想性も進むという読み物だということ。

17

問3…傍線部3のように言うのはなぜか、120字程度で答えよ。

ヒント…指示語の内容を具体化し、その内容が「退化」につながるようになる。

問4…筆者は「理想の女」などを書くためにどのような態度を示しているか、全体の論旨を踏まえ、120字程度で答えよ。

ヒント…まとまっている部分をもとに、要素を拡充していく。

問5…傍線A～Dのカタカナを漢字に直せ。

4

次の文章は、太宰治の小説「眉山^{びざん}」の一節である。小説家の「僕」は芸術家の仲間をつれ、

「若松屋(眉山軒)」という飲み屋によく来る。そのトシちゃんという女中がいるが、「僕」たちは彼女をその無知と凶々しさと騒がしさに耐えかね、眉毛の形から「眉山」とあだ名をつけ馬鹿にしていた。次は「眉山」が階段の上り下りが乱暴であることや、便所をよこすこ

とについて「僕」たちが話している場面から始まる。よく読んで問いに答えよ。

「聞けば聞くほど、いやになる。あすからも、河岸をかえましようよ。いい潮時ですよ。他にどこか、巢を捜しましょう。」

そのような決意をして、よその飲み屋をあちこち覗いて歩いても、結局、また若松屋という事になるのである。何せ、借りが利くので、つい若松屋のほうに、足が向く。

はじめは僕の案内でこの家へ来たらしい頭の禿げた林先生すなわち洋画家の橋田氏なども、その後は、ひとりでやって来てこの家の常連の一人になったし、その他にも、二、三そんな人物が出来た。

あたたかくなって、そろそろ桜の花がひらきはじめ、僕はその日、前進座の若手俳優の中村国男君と、眉山軒で逢って或る用談をすることになっていた。用談というのは、実は彼の縁談なのであるが、少しややこしく、僕の家では、ちよつと声をひそめて相談しなければならぬ事情もあったので、眉山軒で逢って互いに大声で論じ合うべく約束をしていたのである。中村国男君も、その頃はもう、眉山軒の半常連くらいのところになっていて、

そうして眉山は、彼を中村武羅夫氏なかむらむらおだとばかり思い込んでいた。

行ってみると、中村武羅夫先生はまだ来ていなくて、林先生の橋田新一郎氏が土間のテーブルで、ひとりでコップ酒を飲みニヤニヤしていた。

「壮観でしたよ。眉山がミソを踏んづけちゃってね。」

「ミソ?」

僕は、カウンターに片肘をのせて立っているおかみさんの顔を見た。

おかみさんは、いかにも不機嫌そうに眉をひそめ、それから仕方無さそうに笑い出し、

「話にも何もなりやしないんですよ、あの子のそそっかしさったら。外からバタバタ眼つきをかえて駆け込んで来て、いきなり、ずぶりですからね。」

「踏んだのか。」

「ええ、きょう配給になったばかりのおミソをお重箱に山もりにして、私も置きどころが悪かったのでしょうけれど、わざわざそれに片足をつつまなくてもいいじゃありませんか。しかも、それをぐいと引き抜いて、爪先立ちになってそのまま便所ですからね。どんなに、こらえ切れなくなっていたって、何もそれほどあわて無くてもよろしいじゃございませんか。お便所にミソの足跡なんか、ついていたひには、お客さまが何と、……」

と言いかけて、さらに大声で笑った。

「お便所にミソは、まずいね。」

と僕は笑いをこらえながら、

「しかし、御不浄へ行く前でよかった。御不浄から出て来た足では、たまらない。何せ眉山の大海といってね、有名なものだからね、その足でやられたんじゃ、ミソも変じてクソになるのは確かだ。」

「何だか、知りませんがね、とにかくあのおミソは使い物になりやしませんから、いまトシちゃんに捨てさせました。」

「全部か？　そこが大事なところだ。時々、朝ここで、おみおつけのごちそうになる事があるからな。後学のために、おたずねする。」

「全部ですよ。そんなにお疑いなら、もう、うちではお客さまに、おみおつけは、お出し致しません。」

「そう願いたいね。トシちゃんは？」

「井戸端で足を洗っています。」

と橋田氏は引き取り、

「とにかく壮烈なものでしたよ。私は見ていたんです。ミソ踏み眉山。吉右衛門きちえもんの当り芸になりそうです。」

「いや、芝居にはなりますまい。おミソの小道具がめんどくです。」

橋田氏は、その日、用事があるとかで、すぐに帰り、僕は二階にあがって、中村先生を待っていた。

ミソ踏み眉山は、お銚子を持ってドスンドスンとやって来た。

「君は、どこか、からだが悪いんじゃないか？　傍に寄るなよ、けがれるわい。御不浄にばかり行ってるじゃないか。」

「まさか。」

と、たのしそうに笑い、

「私ね、小さい時、トシちゃんはお便所へいちども行った事が無いような顔をしているって、言われたものだよ。」

「貴族なんだそうだからね。……しかし、僕のいつわらざる実感を言えば、君はいつでもたつたいま御不浄から出て来ましたって顔をしているが、……」

「まあ、ひどい。」

でも、やはり笑っている。

「いつか、羽織の裾を背中に背負ったままの姿で、ここへお銚子を持って来た事があったけれども、あんなのは、一目瞭然、というのだ、文学のほうではね。どだい、あんな姿で、お酌するなんて、失敬だよ。」

「あんな事ばかり。」

平然たるものである。

「おい、君、汚いじゃないか。客の前で、爪の垢をほじくり出すなんて。こっちは、これでもお客だぜ。」

「あら、だって、あなたたちも、皆こうしていらっしやるんでしょう？　皆さん、爪がきれいだわ。」

「ものが違うんだよ。いったい、君は、風呂へはいるのかね。正直に言ってみろ。」

「それあ、はいりますわよ。」

と、あいまいな返事をして、

「私ね、さつき本屋へ行ったのよ。そうしてこれを買って来たの。あなたのお名前も出ていてよ。」

ふところから、新刊の文芸雑誌を出して、パラパラ頁を繰って、その、僕の名前が出てるところを捜している様子である。

「やめろ！」

こらえ切れず、**僕は怒声を発した。**打ち据えてやりたいくらいの憎悪を感じた。

「そんなものを、読むもんじゃない。わかりやしないよ、お前には。何だってまた、そんなものを買って来るんだい。無駄だよ。」

「あら、だって、あなたのお名前が。」

「それじゃ、お前は、僕の名前の出ている本を、全部片っ端から買い集めることが出来るかい。出来やしないだろう。」

へんな論理であったが、僕はムカついて、たまらなかった。その雑誌は、僕のところにも恵送せられて来ていたのであるが、それには僕の小説を、それこそ、クソミソに非難している論文が載っているのを僕は知っているのだ。それを、眉山がれいの、けろりとした顔をして読む。いや、そんな理由ばかりではなく、眉山ごときに、僕の名前や、作品を、少しでもいじられるのが、いやでいやで、堪え切れなかった。いや、案外、小説がメシより好き、なんて言っている連中には、こんな眉山級が多いのかも知れない。それに気附かず、作者は、汗水流し、妻子を犠牲にしてまで、そのような読者たちに奉仕しているのはあるまいか、と思えば、泣くにも泣けないほどの残念無念の情が胸にこみ上げて来るのだ。

「とにかく、その雑誌は、ひっこめてくれ。ひっこめないと、ぶん殴るぜ。」

「わるかったわね。」

と、やっぱりニヤニヤ笑いながら、

「読まなければいいんでしょ？」

「どだい、買うのが馬鹿の証拠だ。」

「あら、私、馬鹿じゃないわよ。子供なのよ。」

「子供？ お前が？ へえ？」

僕は二の句がつげず、しんから、にがり切った。

それから数日後、僕はお酒の飲みすぎで、突然、からだの調子を悪くして、十日ほど寝込み、どうやら恢復かいふくしたので、また酒を飲みのみに新宿に出かけた。

黄昏の頃だった。僕は新宿の駅前で、肩をたたかれ、振り向くと、れいの林先生の橋田

氏が微醺^{びくん}を帯びて笑って立っている。

「眉山軒ですか？」

「ええ、どうです、一緒に。」

と、僕は橋田氏を誘った。

「いや、私はもう行って来たんです。」

「いいじゃありませんか、もう一回。」

「おからだを、悪くしたとか、……」

「もう大丈夫なんです。まいますよう。」

「ええ。」

橋田氏は、そのひとらしくも無く、なぜだか、ひどく渋々応じた。

裏通りを選んで歩きながら、僕は、ふいと思いついたみたいな口調でたずねた。

「ミソ踏み眉山は、相変らずですか？」

「いないんです。」

「え？」

「きょう行って見たら、いないんです。あれは、死にますよ。」

ぎよつとした。

「おかみから、いま聞いて来たんですけどね、」

と橋田氏も、まじめな顔をして、

「あの子は、腎臓結核だったんだそうです。もちろん、おかみにも、また、トシちゃんにも、そんな事とは気づかなかつたが、妙にお小用が近いので、おかみがトシちゃんを病院に連れて行って、しらべてもらったらその始末で、しかも、もう両方の腎臓が犯されていて、手術も何もすべて手おくれで、あんまり永い事は無いらしいですね。それで、おかみは、トシちゃんには何も知らせず、静岡の父親のもとにかえしてやっただけなんです。」

「そうですか。……いい子でしたがね。」

思わず、溜息と共にその言葉が出て、僕は狼狽²し、自分で自分の口を覆いたいような心地がした。

「いい子でした。」

と、橋田氏は、落ちついてしみじみ言い、

「いまどき、あんないい気性の子は、めったにありませんよ。私たちのためにも、一生懸命つとめてくれましたからね。私たちが二階に泊って、午前二時でも三時でも眼がさめるとすぐ、下へ行って、トシちゃん、お酒、と言えば、その一ことで、ハイツと返事して、寒いのに、ちっともたいぎがらずにすぐ起きてお酒を持って来てくれましたね、あんな子は、めったにありません。」

涙が出そうになったので、僕は、それを「まかそうとして、

「でも、ミソ踏み眉山なんて、あれは、あなたの命名でしたよ。」

「悪かったと思っっているんです。腎臓結核は、おしっこが、ひどく近いものらしいですからね、ミソを踏んだり、階段をころげ落ちるようになって降りてお便所にはいるのも、無理がないんですよ。」

「眉山の大海も？」

「きまっていますよ、」

と橋田氏は、僕の茶化すような質問に立腹したような口調で、

「貴族の立小便なんかじゃありませんよ。少しでも、ほんのちよつとでも永く、私たちの傍にいたくて、我慢に我慢をしていたせいですよ。階段をのぼる時の、ドスンドスンも、病気でからだが大儀で、それでも、無理して、私たちにつとめてくれていたんです。私たちみんな、ずいぶん世話を焼かせましたからね。」

僕は立ちどまり、地団駄踏みたい思いで、

「ほかへ行きましょう。あそこでは、飲めない。」

「同感です。」

³ 僕たちは、その日から、ふつと河岸をかえた。

問1…傍線部1「僕は怒声を発した」のは、なぜか。80字程度で答えよ。

問2…傍線部2において、「僕」はどのような心境か。60字程度で答えよ。

問3…傍線部3のようにしたのは、なぜか。80字程度で答えよ。

答え

1

答え…人間生来の性質により開化が進んでいるために、一見、生活が楽になっ
ていなければならぬはずである。しかし、実際は開化がすすむほど生活が苦
しくなっているように思われる。昔はやむを得ず死ぬか生きるかのために争っ
たが、今日は、どのように生きるかという問題に腐心しなければならなくなっ
た。

3

答え1…一般の人が使う日常的な言葉が、理想について架空なものを言い表す
ことと違い、文学は、真偽を判断する冷酷な作者という存在があるため、確た
る信念思想でない架空のものは書かれず、意図に反して現実的で低俗醜悪な魂
や人間を書くということ。(113字)
答え2…③

答え3…戯作性が通俗、不純なものとして純文学の範囲でないとされたことは、自然派の文学には思想を進展させる戯作性を取り込むだけのたくましい思想がなく、人生を未来に託して、常により高く生き抜こうという理想への必死な意欲がないことになるから。(114字)

答え4…思想を発展させる戯作性を否定せず、人間の可能性を未来に託し、常に高く生きぬこうという理想を書き表したいとする必死な意欲を信じると同時に、書き続けるという反復によってひとつずつ理想に向かい向上していこうとする態度を示している。(112字)

答え5…A) 精神 B) 汚辱 C) 弄 D) 人格

4

答え1…自分の小説をひどく非難している論文がのった文芸雑誌を、文学に素人の眉山が平然と読み、自分の名前や作品をいじられることが嫌で耐えられなかったから。(72字)

答え2…馬鹿にしていた眉山が重い病気だと知り、思わず残念そうに、眉山を良く言った自分に動揺しており、失言したと思っている。(57字)

答え3…眉山が腎臓結核であり、先も永くないことを知り、一生懸命対応してくれたいじらしい眉山を馬鹿にしていた自分に罪悪を感じ、店にいくのが気まじくなつたから。(74字)